

# 戦後初期における国語教育の実態に関する研究

— CIE への質問 (1946.12) の分析・考察を通して —

吉田 裕久

(2013年10月3日受理)

A Study on the Realization in Japanese Language of the Early Postwar Years  
— Based on the analysis and examination of 33 questions (1946.12) to CIE —

Hirohisa Yoshida

**Abstract:** Messrs Kurasawa and Ando requested that Mr Halpern appear at a round table on methods of language teaching. Mr Halpern attended the round table with Mrs.Helen Heffernan. She was a Elementary Schools Officer. She spent most unsatisfactory from the point of view of interpretation. But the round table is historical event in Japanese Language of the Early Postwar Years.

Key words: Early Postwar Years, Japanese Language Education, GHQ/CIE, Teaching of Language

キーワード：戦後初期, 国語教育, GHQ/CIE, 学習指導法

## はじめに

GHO/CIE 文書の中に、興味深い文書を見出した。戦後国語教育のリーダー的存在となる倉澤栄吉と安藤新太郎とが、戦後まもなくの時期に、CIE に提出したと思われる文書である。実は早く、30年以上も前の1980年頃に見出していたのだが、その性格や位置、意義等がよく分からなく、気になる資料でありながら、そのまま経過してきていた。この間、倉澤自身にもこの文書のことについて尋ねたことがあるが（この文書を持参した上でなかったのが残念だが）、倉澤自身の記憶には止められていなかった。

その後も資料調査を重ねる中で、今日、やっとこの文書の性格や位置づけ、意義などが見えてきたように思う。そこで、本文書を戦後初期における国語教育の実態を反映するその一端として提示したいと思う。本稿は、その文書を中心に周辺資料も合わせて分析・考察することによって、戦後初期国語教育、とりわけ学習指導要領作成前夜の国語教育の実態の一コマを明らかにしようとするものである。

## 1. ラウンドテーブルへの出席依頼

その文書というのは、国語教育の方法 (Language Teaching Method) に関する33の質問が記された文書のこと（以下、33の質問）である。それ自体を掲げる前に、この33の質問の背景・目的・前提などを理解する上で参考になるCIE側の報告があるので、それを先に話題として取り上げることにする<sup>1)</sup>。以下の報告 (Conference Report) である。

18 Dec. 46.

Radio Tokyo Room 602

Prof. Kurasawa of Tokyo Higher Normal School;  
Prof. Ando of 20th Girls' High School; Mr  
Halpern and Mr Takahashi of CIE.

Language Teaching Methods.

1. Messrs Kurasawa and Ando requested that

Mr Halpern appear at a round table of Tokyo Language teachers on methods of language teaching.

2. Mr Halpern indicated willingness to attend, but explained that he was not primarily a language teacher and was not especially acquainted with methods used in elementary and secondary schools. He suggested that other members of the Education Division be included in the invitation.

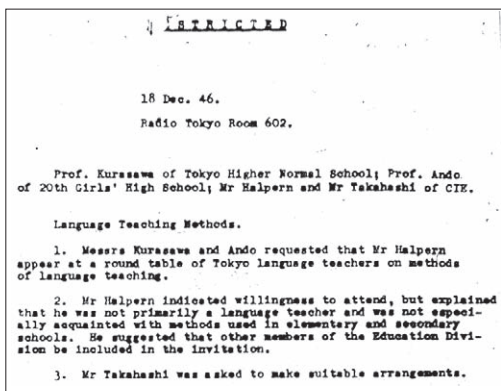
3. Mr Takahashi was asked to make suitable arrangements.

A.M.HALPERN

Adviser on Language Revision

つまり、この報告は、

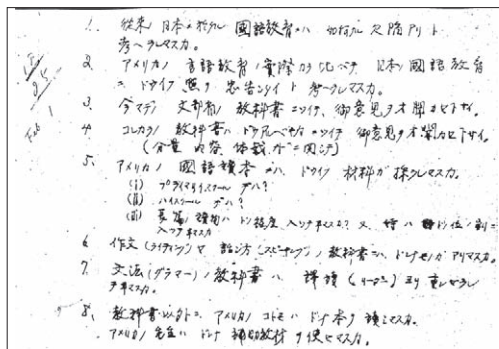
1946年12月18日、倉澤と安藤がハルパンの執務室であるラジオ東京の602号室を訪ねてきた。用件は、国語教育の方法に関する東京の国語教師のためのラウンドテーブルに出席してほしいという依頼である。ハルパンは、喜んで出席するが、自分自身は小学校教師であったことがなく、小中学校の指導方法について精通していない。教育課の他のメンバーと一緒に出席することにした。調整を通訳の高橋に委ねることにする。というものである。



この会議報告と一緒に、「33の質問項目」がファイルされている<sup>2)</sup>。

2. 33の質問

本文書(33の質問)は、以上の会議への出席依頼の際、倉澤と安藤からハルパンに提出された(手渡された?)と思われるものである。5ページから成っており、倉澤・安藤自身の手になると思われる自筆原稿である。日本語で記されている。33項目のうち、大半の30項目が倉澤からのものであり、残りの3項目が安藤からのものである。その1枚目だけを写真で示す。



33項目の質問は、以下の通りである。

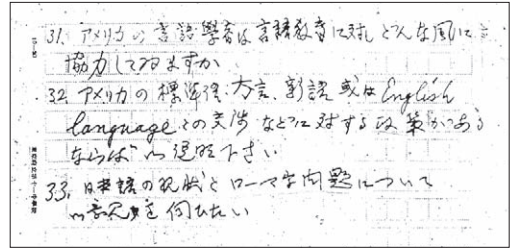
質問1から30までの表記は、漢字カタカナ文になっている。

1. 従来ノ日本ニ於ケル国語教育ニハ、如何ナル欠陥アリト考ヘラレマスカ。
2. アメリカノ言語教育ノ實際カラ比ベテ、日本ノ国語教育ニドウイフ点ヲ忠告シタイト考ヘラレマスカ。
3. 今マデノ文部省ノ教科書ニツイテ、御意見ヲオ聞カセ下サイ。
4. コレカラノ教科書ハドウアルベキカニツイテ、御意見ヲオ聞カセ下サイ。(分量、内容、体裁ナドニ関シテ)
5. アメリカノ国語読本ニハ、ドウイフ材料ガ採ラレマスカ。  
(i) プライマリイスクール デハ?  
(ii) ハイスクール デハ?  
(iii) 長編ノ読物ハドノ程度入ッテキマスカ?  
又、詩ハドノ位ノ割ニ入ッテキマスカ?
6. 作文(ライティング)ヤ話シ方(スピーキング)ノ教科書ニハ、ドンナモノガアリマスカ。
7. 文法(グラマー)ノ教科書ハ、訳読(リーダー)ヨリ重ンゼラテキマスカ。
8. 教科書以外ニ、アメリカノコドモハドンナ本ヲ読ミマスカ。アメリカノ先生ハドンナ補助教材ヲ使ヒマスカ。
9. アメリカノ先生タチハ、国語教育ノ目標ヲドウイフ点ニオイテキマスカ。小学校デハ? 中学校デハ?
10. アメリカノ国語教育デ、先生タチガパーバン骨ヲ折ルノハ何デスカ(発音? 語ノ解釈? グラマー? ソレトモ作文?)
11. アメリカノ国語教育デハ、次ノ色々ノ方法ノ中、ドレガ最モ多ク行ハレテキマスカ。  
レクチャーメソッド、自学自習、ディスカッション

12. アメリカノ話シ方ノ教授ハ、ドンナ風ニ行ハレテキルノデセウカ。
13. アメリカノコドモハ文法ラーバン嫌ッテキマセンカ。文法ノ嫌ヒナコドモニハ、ドウイフ風ニシテ、興味ヲ与ヘ、勉強サセマスカ。
14. 作文ニオイテ、綴字ノアヤマリヲ直スニハ、ドンナ方法がトラレテキマスカ。
15. アメリカデモ日本ノヤウニ、リーダーヲ個人読、一斉読、先生ノ範読、黙読ナド、色々ノ読ミ方ヲシマスカ。
16. アメリカデハ、教科書ノ予習・復習ハドウイフ風ニサセマスカ。予習・復習ノ時ハ何ニタヨリマスカ。(辞引? 友人? 両親? 先生?)
17. ノートハ、ドウイフ風ニ利用シマスカ。
18. アメリカノ学校デハ、宿題ハナイト聞キマシタガ、ドコデモサウデスカ。夏休ナドノ宿題ハドウナノデスカ。
19. アメリカノ試験ト日本ノ試験トハ、本質的ニチガヒマスカ。国語ノ試験ヲ科学的(合理的)ニスルニハ、ドンナ注意ガ必要デセウ。
20. 国語ノ学力ノ劣ッテキル生徒ニハ、ドンナ手当ガ有効デスカ。
21. 学力ノアル生徒ヲ伸バスタメニ、ドンナ方法ガ採ラレテキマスカ。
22. 人々ノ前デ、ハッキリトモノガ言ヘナイコドモニ対シテ、アメリカノ先生ハドウイフ手段ヲ以テ臨ミマスカ。
23. 日本ノコドモニローマ字ヲ教ヘルノニ、理想的ナ方法?
24. 日本ノ習字(書道)教育ヲ、貴下ハ、ドウオ考ヘニナリマスカ。
25. 中等学校ニオケル、漢文オヨビ古典教育ニツイテハ、ドウオ考ヘニナリマスカ。
26. アメリカデハ、文字言語ト音声言語ト、ドチヲ重ンジマスカ。ソノ理由ハ?
27. アメリカノコドモノ読みノ速サト書く速サノ平均ヲ知リタイノデスガ。年齢別ニ。(一分間ニ何字読ミ何字書クカ?)
28. 日本デハ、小学校デ最も国語教育ガ盛ンデス。アメリカデハドノ年齢ノコドモニ、一バンカヲソソギマスカ。
29. 日本ノ国語教師ハ、他教科ノ先生ニ比ベテ物識リタル事ガ要求サレマス。アメリカデモサウデスカ。アメリカノ国語教師ハ主トシテ、ドウイフ勉強ヲシテキマスカ。
30. 日本再建ノタメニ、日本ノ国語教師ニ、貴下ハ、何ヲ最も要望サレマスカ。

ここまでの30項目は、倉澤の質問だと思われる。というのは、文書中に署名も日付も記されていないが、①質問30までと31以降とは明らかに筆跡が異なっていて、筆者の知る限り質問1から30までは倉澤の筆跡に近いこと、②質問30までは倉澤用箋が使用されていることなどから、そのように判断してはば間違いないと思われる。

質問31からは筆跡も替わるが、ページも替わる。用箋も東京府立第十一中学校のものが用いられている。



31. アメリカの言語学者は言語教育に対し、どんな風に協力してありますか。
32. アメリカの標準語、方言、新語、或は English Language との交渉などに対する政策があるならば御説明下さい。
33. 日本語の現状とローマ字問題について御意見を伺ひたい。

以上の33項目である。

倉澤は、この時、文部省の教育行政(とりわけ中等の国語教育)に協力する立場にあった。やがて東京都教育委員会指導主事、文部省の視学官として1958年の学習指導要領を作成し、戦後の国語教育の中核で常にリーダーとして活躍した。倉澤が、この一大転換期に、広い問題意識を持ち、近代的な国語教育を打ち立てようとして、それをCIEに投げかけた意味は決して小さくないように思う。倉澤は、この直後(1948年10月10日)、『国語学習指導の方法』(世界社、奥付の著者紹介には、千葉師範学校教授とともに、文部省教科書編纂委員とある)という、本33の質問の問題意識に近い著作を刊行している。

安藤新太郎は、この時、東京府立第二十高等女学校教諭であった。安藤も、文部省の教育行政(とりわけ中等の国語教育)に協力し、この後、東京都立赤城台高等学校教諭、東京都教育庁指導主事を歴任し、1951年度学習指導要領編纂委員を務めるなど、主として高校国語教育の場で活躍した。『新制高校国語科学習書』(共著、1949、有朋堂)などがある。ここで使用されている東京府立第十一中学校の用紙については、よく分らないが、この時期、旧制から新制への切り替え

の時期にあたっていたことが影響しているのか、あるいは単純に手元のもので利用されただけのことか、事情はよくわからない。なお、質問31からの表記は、漢字ひらがな文になっている。こうした表記の不統一などにも、時代性をうかがうことができよう。

### 3. 質問33の内容と特質

さて、この文書の内容であるが、多種多様、順不同の感がある。そこで、少し整理しておきたい。その観点として、(1)内容、(2)時期、(3)人、以上の観点を設定する。

#### (1) 内容

国語学習の全領域に及んでいることがわかる。これを掲載順に見ると、次のようになる。

- 日本国語教育の欠陥及び忠告
- 国語教科書（文部省教科書・あるべき教科書）に対する意見
- アメリカの国語教科書（小学校・中学校、長編読み物、詩、作文、話し方、文法）の現状
- 教科書以外（読み物、補助教材）
- アメリカの先生の国語教育の目標、課題（発音、語の解釈、文法、作文）
- アメリカの指導方法（講義法、自学自習、ディスカッション、)
- アメリカの話し方教育、文法教育（文法嫌い）、作文教育（綴字の誤り）、読み方教育（個人読み、一斉読み、範読、黙読など）
- アメリカの子どもの予習・復習の実態
- アメリカの子どものノート利用の実態
- アメリカの宿題、試験
- アメリカの低学力、高学力の子どもへの対応
- アメリカの人前でもの言えない子どもへの対応
- ローマ字の理想的指導法
- 日本の習字教育・漢文教育・古典教育に対する意見
- アメリカの子どもの読みのスピード、書きのスピード
- アメリカの初等・中等国語教育の現状
- アメリカ国語教師の特性と勉強法
- 日本の国語教師への要望
- アメリカにおける言語学・言語教育との協力関係
- アメリカの国語政策
- ローマ字問題

基本的には、日本の国語教育に対して、アメリカの進んだ立場から、アドバイスを求めようとしたものと思われる。いくつか、特色が指摘できようか。

- ・多岐にわたっているものの、順不同の感がある

（学力、読み物、補充教材、作文、話し方、文法、……、あたかも当時の日本における国語教育の困難な状況を全部問いただしているかのようである）。

- ・やや中等教育的か。漢文・古典、文法等に触れながら、入門期には及んでないことなど。
- ・公文書的というより、メモ的なものであったのかもしれない。（文章として統一が必ずしも取れていない。基本的には「です・ます体」だが、体言止めがあったり、付けたし的な所があったりしている。
- ・ローマ字、ディスカッションなど、時勢を反映した問いも見られる。
- ・安藤の問いは3項目であるが、倉澤がその多くを国語教育の方法に向けているのに対して、言語学、国語学と国語教育との関連を取り上げており、ハルパンの専門性に近い問いをしているようである。

総じて内容的には、アメリカの進んだ教育を我が国のこの混乱状況の中で活用したいという姿勢で貫かれているように思われる。

#### (2) 時期

1946年12月18日といえば、新教育（1947年4月開始）で用いられる国定教科書の編修が一息つく頃であったろうか。そして、引き続き学習指導要領の作成に取りかかる頃であろうか？これらに共通する学習指導に対する理念・理論の希求があったのではないかと考えられる。この時期、国語科のみならず、英語科でも Teaching English 等が話題になっている。新教科の社会科などでは、単元学習がもっぱら話題として取り上げられようとしている。こうした時代的風潮の中で、効果的な指導方法を求めてその模索が行われていたものと思われる。

#### (3) 人

ここで、倉澤・安藤は、なぜハルパンを訪ねてラウンドテーブルへの出席を依頼し、指導方法の助言を求めたのか。この時、中等の係官としてはオズボン (Monta L. Osborne) がいた。もう少し時期が下がると、1947年6月頃から、国語科学習指導要領の作成に当たって、オズボンと盛んにミーティングが持たれ、単元 (ユニット) の導入・あり方をめぐってかなり困難な状況を迎えている。なぜオズボンでなくて、ハルパンだったのか？オズボンはこの時期、社会科の教科書、学習指導要領に集中していて、なかなか国語に向かうことができない。そんなことも影響していたのかもしれない。一方、ハルパンは、国語改革、ローマ字学習、あるいは国語簡素化と国語学習指導の側面



等で、国語人との交流が密であった、そうしたことも反映していたのかもしれない。現に、1946年5月31日の文書には、Language Reform and Language Teaching Methods という国語改革と国語指導法そのものをタイトルにした文書なども見られる。

こうして、1946年12月、まさに新教育の前夜、国語科の学習指導要領がまだ全く見えない時期に、ニューリーダーの一人である倉澤と安藤によって、国語教育の方向性を見出そうとする営みがアメリカ側 CIE に働きかけられていたのである。

#### 4. 33の質問の英訳、専門家の依頼

さて、このラウンドテーブル出席の依頼、そして33の質問に対する助言のその後はどうなったのか。ハルバンは、「別の人を伴って」出席すると約束していたが、別の人とは誰のことか？そして、その同伴は果たして実現したのか？

##### (1) 33の質問の英訳

倉澤・安藤の33の質問は英訳されていた。右の2枚のペーパーがそれである<sup>3)</sup>。幾つか冒頭の項目の英訳を示すと、以下の通りである。

1. What weak points do you find in Language Education of Japan ?
2. What do you like to advise to our Language Education from the standpoint of American Linguistic Education ?
3. We would like to know your conceptions concerning to textbooks (compiled by the Mombusho)
4. We would like to know your opinions about what textbooks should be (concerning quantity, quality, format, etc.)
5. From what kind of sources are materials taken into Language Books in US ?  
 ( i ) Primary School Textbooks ?  
 ( ii ) High School " "  
 ( iii ) Lengthy articles included ? Poems ?
6. What kind of "Writing Textbooks" and "Speaking Textbooks" are used in US ?
7. Is more importance attached to "Grammar Textbook" than to "Readers" ? (以下略)

そして、この英訳が、別の人 (other member) に依頼文とともに渡っていくのである。

1. What weak points do you find in Language education of Japan?
2. What do you like to advise to our Language Education from the standpoint of American Linguistic Education?
3. We would like to know your conceptions concerning to textbooks (compiled by the Mombusho).
4. We would like to know your opinions about what textbooks should be (concerning quantity, quality, format, etc.)
5. From what kind of sources are materials taken into Language books in US?  
 (i) Primary School Textbooks?  
 (ii) High School " "  
 (iii) Lengthy articles included? Poems?
6. What kind of "Writing Textbooks" and "Speaking Textbooks" are used in US?
7. Is more importance attached to "Grammar Textbook" than to "Readers"?
8. What kind of books are read besides textbooks? What kind of supplementary materials are used?
9. Aims of Language education in US? Primary school? Secondary school?
10. On what point do American teachers work hard in Language education?  
 Pronunciation?  
 Construction?  
 Grammar?  
 Writing?
11. What method is mostly used in Language Education?  
 Lecture Method?  
 Self-study " ?  
 Discussion " ?
12. How is "Speaking Teaching" carried on?
13. Don't American children hate "Grammar"? Is any special measure taken for those who hate "Grammar" in order to get them interested in it?
14. What method is taken in order to promote children's spelling ability? How to correct misspelled words in their writings?
15. Is reading conducted by  
 Individual reading,  
 Group  
 Teacher's Model Reading,  
 Silent Reading?
16. Are preparation and review of lessons required? Whom do children consult with in preparing or reviewing lessons?  
 Dictionary, friends, parents, teachers?
17. How are their notebooks used?
18. Are home tasks assigned to children? Summer vacation home works?
19. Fundamental differences between American "test" and Japanese "test"?
20. What measures are most effectively for those who are inferior (or backward) in Language.
21. What measures are taken so that those who are good may be able to develop more their ability.

22. What kind of methods are available for those pupils who cannot express their ideas clearly in the public?
23. Any good method for Home-Ji for Japanese children?
24. What do you think about Japanese calligraphy?
25. What do you think about Kenbun (Chinese classics) and other classic education?
26. Which is to be emphasized written or spoken language?
27. Reading speed and writing speed? How many words in a minute?
28. Language Education is most active in Japan. On what age pupils is it most emphasized.
29. Language teachers should be men of great knowledge in Japan. In America, too?
30. What do you like to advise to Japanese Language Education teachers for the reconstruction of Japan?
31. In what ways American philologists cooperate in linguistic education?
32. Any policies on the Standard Language, the Dialects, New words and English Language (not American Language)?
33. Your opinions on Home-Ji problem.

Mrs. Heffernan -  
 The language teacher of the 20th Girls' Higher School want these questions answered. I don't have the answer and think probably you do. Would you be interested in coming along on this - Jan 25 (Saturday) - 2 P.M.?  
 I'd appreciate it very much.  
 W. M. Halpern

##### (2) 別の専門家の依頼

この33の質問 (英訳) の下部余白に、ハルバン自筆の以下の添え書きが付記されている。

Mrs. Heffernan  
 The Language teacher of the 20th Girls' Higher School want these questions answered. I don't know

the answer and think proberbly you do. Would you do interested in coming along on his — Jan 25 (Saturday) — 2 P.M. ? I'd appreciate very mnch.

L.M.Halpern

ヘファナン女史へ

第二十高等女学校の国語教師が助言を求めている。私はそれに答えることはできないが、あなたならたぶんできるでしょう。1月25日(土曜日)午後2時開催の彼の会に出席してもらえませんか。ありがとうございます。

ハルパン

こうして、33の質問は英訳されて、別の、ヘファナンに届けられたようである。

ヘファナンは、この時、主として初等教育担当(Elementary Schools Officer)で国語教育を中心に担当していた。石森延男、猪股辰弥、小山定良たちと、国語教科書、国語学習指導要領などでミーティングを重ねていた人物である。まさに小学校、及び国語教育の実際を語りうる格好の人物が紹介されたのである。

## 5. ラウンドテーブル(1947年1月25日)

### (1) ラウンドテーブル<sup>4)</sup>

そして、このハルパンからの申し出に、ヘファナンは進んで参加したようである。ヘファナンの文書(1947.1.25)には、次のようにある<sup>5)</sup>。

25 January 1947

20th Girls School, Tokyo

Approximately 200 elementary and secondary school teachers H. Heffernan, H.M. Halpern, CI&E

Round Table Discussion on the Teaching of Language.

At Mr. Halpern's request, the Elementary schools Officer attended a meeting Saturday afternoon, 25 January 1947, at 20th Girls Schools. About an hour and a half was spent answering questions raised by the teachers. The interpreter was a man who had been in the chemical exporting business twenty-five years ago, the meeting was most unsatisfactory from the point view of interpretation.

こうしてハルパンからの申し出に基づいて、約一ヶ

月後の1947年1月25日(土)、東京都立第二十高等女学校を会場にして、約200人の小中教師たちが集まってラウンドテーブル(講演?)が行われた。ヘファナンは、1時間半にわたって倉澤・安藤から出された先の33の質問に対して答えたのであろう。が、通訳に課題があった。その時の通訳は、20年間、化学輸出関連のビジネスマンであった人であり、通訳の観点から言えば最悪の状態であったと、ヘファナンは大きな不満を漏らしている。

つまり、ヘファナンは1時間半ほど、先の33の質問をめぐって話したようである。が、通訳のまずさ、おそらくビジネス会話と教育専門用語(ターム)との間で齟齬があったのであろう。その事は想像に難くない。話し手のヘファナンに不満があったということは、おそらく聞き手の教師たちにもこの雰囲気は反映したのではないと思われる。双方に失望感を与えたラウンドテーブルであったかもしれない。

ヘファナンがそれぞれの項目に具体的にどう答えたか、その内容は残念ながら知ることはできない。が、こうしてCIEの直接の担当者から、公開の場で多くの国語教師が国語教育の方向性を聞く機会が得られたのは意義あることであったろう。

倉澤・安藤の国語教育の方法に関する33の質問は、こうして公開の場で、ヘファナンの解答を得る形で実現した。この時期、200人も教師を一同に集めたというのだから驚きである。いわゆる主催者側の発表ではなく、ゲストとして招かれた側の受けとめである。この時期、国語教師たちの国語教育への関心の高さがうかがわれる。しかし、返す返すも通訳のまずさの理由で、ヘファナンに満足がいかなかったのは残念である。

## 6. 影響

こうして倉澤・安藤による33の質問( Teaching of Language)は、公開の場に出されて共有されていくことになった。この質問が、その後の国語教育にどう反映・影響していったのか。およそ次の2つの点で考えることができるように思う。

### (1) 国語学習指導法

### (2) 学習指導要領

この順序で、取り上げていくことにする。

### (1) 国語学習指導法

国語教育をどう進め、展開すれば良いのか、時代の急転に伴って、実践の場での最大の課題であったと思われる。33の質問の大半も、ここに帰結していた。

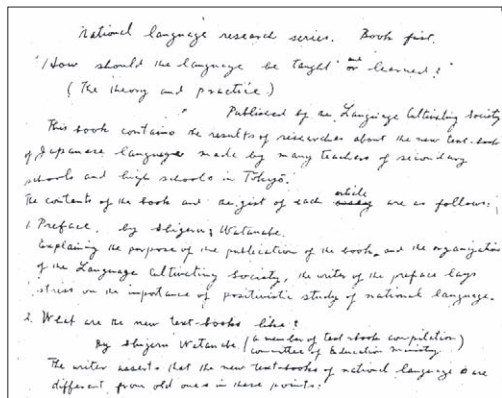
この“Teaching Method”ということ言えば、この後、文部省側(協力者も含めて)から実践の手引きという形で幾つかの書物が刊行されている。いま学校

種ごとに代表的な物を挙げれば、次のようになる。

- 小学校——文部省国語教育研究会『小学校国語学習指導の手引き』(1949年4月25日, 時事通信社)
- 中学校——ことばをそだてる会『国語教育研究叢書第一冊 どう教えどう学ぶか—理論と実践—』(1947年9月25日, ことばをそだてる会)
- 高等学校——文部省内国語教育研究会『高等国はいかにして学ぶか』(1949年3月25日, かすみ書苑)
- 通信教育——文部省『通信教育学習書 中等国語一上』(1948年9月30日, 慶応通信教育図書), 及び文部省『通信教育学習書 高等国語一上』(1948年12月25日, 教育図書), それぞれ三下まで刊行。

これらに共通しているのは、「国語の学習をどう進めていったらよいのか」である。“Teaching Method”と「教え・学び」との深い関連・結びつきを感じることができよう。

実は、先の33の質問が収められていた Box no.5436 のファイルに、中学校の刊行物『どう教えどう学ぶか』の英訳(要旨)が収められている。次の写真は、その冒頭部分である。



この同じファイルに収載されているという事実は、単に偶然とは考えられにくい。やはり何らかの関連があると考えるのが自然であろう。ちなみに、『どう教えどう学ぶか』の構成は、次のようになっている。

- はじめに わたなべしげる
- 新教科書はどんなものか 渡邊茂
- どう教えどう学ぶか 飛田隆
- 立場の確立 上甲幹一
- 問題となるところ
- 中等国語一 飛田隆
- 中等国語二 大村濱
- 中等国語三 安藤新太郎
- 高等国語一 鳥山榛名
- 高等国語二 長谷川敏正
- 導くものの立場から(指導の実際)

「短歌と俳句」—歌ごころ 入江妙子

笛吹川をさかのぼる 鳥山榛名

エッセイ 安藤新太郎

現代かなづかいの表現力に関する調査 鳥山榛名

鳥の毛 五味智英

おわりに 小田恒次郎

本書は、はじめに(時代を反映する理論的な論文)、問題となるところ(刊行されたばかりの教科書についての解説)、それに導くものの立場から(指導の実際)(具体的な教材に基づく指導例)という大きく三部構成になっている。本書に、33の質問の発信者の一人、安藤の原稿も2編が収められている。ますます縁浅からぬ感を強くする。

「はじめに」(わたなべしげる)は本書刊行の経緯をよく表していると思われる。その一部を取り出し、てみる。

時代は一変した。(中略)われわれの生活の場である国語教育界においてのいとなみも、多くの問題をはらんでいるが、まずとりあぐべき問題は、国語教育の実証的研究である。われわれはこの問題を、なにもものにとらわれなくて、われわれ自身の手によって研究し、解決してゆかねばならない。

ここに現在国語教育の実際にたざざわり、またこんどの教科書の編さんにもあずかってきた同志が集り、「ことばをそだてる会」を結成し、学制改革後はじめて発行された中等国語および高等国語の各巻の第一分冊を対象として、教科書そのものの編修の構想や、教材の学び方、導き方、そしてその問題となるところなどを取りあげて研究し、これを発表して、一つには実際指導者各位の参考に資し、一つにはおおかたの叱正をこうことにした。(中略)われわれの世界にも新生の朝はきた<sup>6)</sup>。

## (2) 1947年版学習指導要領

倉澤・安藤による33の質問が、その後の国語教育にどのように機能したのか、また影響したのか。直接的というのではないが、時代が次第に学習指導要領の作成に向かっており、この33の質問も、その前触れ・前夜のような位置・性格を持っていたように思われる。学習指導要領の編集にあたっては、その専門の部会が立ち上げられ、頻繁な回数会議を経て編集されていく。初等の担当官がヘファナンであり、中等の担当官がオズボンであった。ヘファナンは教科書作成からの引き続きであり、読むこと、入門期などで、議論を重ねることになる。一方、中等はオズボンが社会科が一段落付いた1947年6月頃から学習指導要領の作成をめぐって、特に単元(作業単元)についての検討を迫ってくる。社会科で単元(Unit)を実現させたオズボン



は、これを国語科にも求めてくることになる。

この時、石森を中心とする文部省の関係者は、いずれも領域的（読むこと等）な学習を想定していた。その後の展開からして、たぶん「寝耳に水」的な状況であったことだろう。この33の質問自体も、領域的な考えで占められており、単元的な考え方はうかがえない。この意味では、大きなパラダイム変換を余儀なくされることになるのである。

## おわりに

1947年4月から、戦後新教育は実施・展開された。それに至る言わば混乱期の戦後初期の国語教育がどのような実態であったのか。とりわけ、この当時、国語教育をリードしていた人たちの問題意識がどこにあったのか。そのことを知りうる資料を見出し、その分析・考察を通して、文字通り、その一端をうかがい知ることができたように思う。まだ明確な方向性をつかみできていないという点で言えば、まさに学習指導要領編集前夜の雰囲気がよく反映されているように思われる。

このラウンドテーブルが開催された1947年1月頃から、学習指導要領の編集作業が急ピッチで始まっていく。それまで文部省は、新教育実施のための教科書の作成に忙殺されていたが、この頃からCIE及び文部省の関心は学習指導要領にシフトしていくことになる。言語活動によって、それぞれの領域の学力を伸ばそうとする経験主義に基づく国語教育の展開である。

\*\*\*\*\*

実は、この倉澤栄吉・安藤新太郎両名による33項目の質問状については、冒頭にも記したように、これを発見したかなり以前から気になっていた。気にはなりながら、その意味（性格、位置付け、意義等）がつかめないまま長い時間を言わば無為に過ごしてきた。当初これが点でしかなく、それを線ととらえることができなかつたからである。しかし、Box no.5339及び5436の倉澤・安藤の33の質問、ハルパンへのラウンドテーブル出席依頼、そしてずいぶん離れるがBox No.5630の33の質問の英訳と別の専門家（ヘファナン）の出席依頼、そしてラウンドテーブルの開催、ヘファナンの不満、とはいえ理論不足の状況下である。開催自体に既に大きな意義があった、——こうした一連の流れが別々のファイルを結び付けることによって、やっと線として理解できることになった。いくつかのファイルを重層的に読み解くことによって、やっと一連の流れとしてつかむことができたのである。その意

味では謎解きの解明のような、面白さも感じ取ることができた。

さらに、ことばをそだてる会の『どう教えどう学ぶか—理論と実践—』の英文要旨が33の質問と同一ファイル<sup>7)</sup>にあることも、Teaching Methodの視点で見るとその意味を理解することができた。これらが国語の学習指導法を求める一筋の動脈として理解することができるように思えてきたのである。

貴重な文書であることは予感しながら、未解決のまま長く水面下に置いてきたが、今やっと一つの「試解」（中間報告の域を出ないかもしれないが）を提示できる。一つの時期を迎えることができた。

## 〔注〕

- 1) Box no.3359, 及び no.5436
- 2) Box no.5436
- 3) Box No.5630
- 4) このラウンドテーブルについて、小久保美子の『CIEカンファレンス・リポートが語る改革の事実—戦後国語教育の原点—』（2002年8月15日、東洋館出版社）によると、「はなしことばの会」である」（p.303）とある。「はなしことばの会」の発足は、1947年3月11日であり、その発会式を安藤が勤務する都立第二十高等女学校で行っている。このラウンドテーブルの開催日は、それを遡ること1年以上も前のことである。となると、このことは成立しないことになる。会の名称がどうであったかの詳細は分からないが、ともかく、約200人を集めたラウンドテーブルが開催されたということだけは事実である。

なお、1947年3月11日の「はなしことばの会」の発足の会については、この時の講演・研究発表・討議をまとめて、『はなしことば叢書 はなしことばの教育』（はなしことばの会編、昭和23年6月25日、世界社）として刊行している。この著書の代表が、安藤である。

こうして、会場の都立第二十高等女学校といい、編集代表といい、はなしことばの会の発足・運営にあたって安藤の果たした役割は大きく、「はなしことばの会」との縁浅からぬことだけは間違いないようである。

- 5) 3に同じ
- 6) pp.3~4
- 7) 2に同じ